令和６年８月定例仙台市社会教育委員の会議　会議録

○日　　時　　令和６年８月２日（金）10：00～12：00
○場　　所　　仙台市役所上杉分庁舎 12 階教育局第１会議室
○出席委員　　阿部哲也委員，安藤直美委員，泉山靖人委員，齋藤愛委員，髙橋美和委員，高橋由臣委員，内藤良介委員，中山慎也委員，朴賢淑委員，松本大委員，若生彩委員（11 名出席）
○事務局職員　　伊勢生涯学習部長，武者生涯学習支援センター長，小幡生涯学習課長，加藤生涯学習課主幹，三澤生涯学習課企画係長，細川生涯学習課生涯学習係長，生涯学習課企画係　松澤主事

○会議の概要

１　開会

２　挨拶（松本委員長）

３　協議事項

（１）今期の協議テーマについて

資料２に基づき，委員長から協議テーマおよび視点の案について説明があった。説明を踏まえ，意見交換を行った。

〔意見等〕

阿部委員　　「子ども」について，児童とかのイメージだと思うが，例えば高校生あたりまで，18 歳以下なのかといった認識を，テーマをイメージするためにも確認しておきたい。

松本委員長　　おそらく，子どもの権利条約等で考えると 18 歳未満になるようだが，ちょっと広すぎるし焦点がぼやけるので，小学生くらいまでかなと思っていた。あとは委員の皆さんのご意見により，検討する必要があるかと思う。
　あと下限をどうするか。上限もそうだが，子どもといっても０歳というわけにはいかないと思う。

安藤委員　　個人的には中学生は入れてほしい。苦しんでいる中学生は結構多く，その子たちがどういられるか，どうやるかというところは地域でも課題になっているところがある。

中山委員　　小学生だけでもよいかなと思いながらも，安藤委員の言われるように確かに中学生に関しても，島根も宮城も不登校傾向の子が多いので，「居場所」というキーワードが入っていると，小も中もありかなと思う。幼稚園とか，さらに未就学児も含めるかどうか。意見出しのときはもちろんあってもよいと思う。また，子どもの「ども」は漢字でもよいのではないかと思うが，それはまた追々。

齋藤委員　　私もどちらかというと中学生は気になっている。別に学校に行くことはできる子たちだとしても，最近部活も制約されていることが多いので，学

校によりばらつきもあり難しいところだが，聞くところによると中学生はなかなか行き場がないようだ。居場所の扱いも難しく，ただ集まる場所なのか，心の居場所なのか，なかなか自分の中でしっくり，これだというのがうまく思い描けないので何とも言えないけれども，中学生は外せないところかなと思う。不登校にもグラデーションがあるが，やっぱりそういう傾向が強いなと思っている。学校に行くことが全てではないが，そういう意味では学校が居場所として成立していない子たちが多いという現状が，仙台市ではあるのかなというふうに思う。

年齢の下限に関しても結構難しいと思っていて，子どもというよりも，親の居場所になってしまう。どうしても親とセットになるので，未就学児くらいまでは子どもの居場所というより親の居場所という表現の方がフィットするかなと思う。私たちが開く場に来る方たちも結局，親が連れてこないと来られない子たちなので，子どもだけに限定できないというところがある。

外国にルーツを持つ子どもについても，うちの教室に中国籍のお子さんや韓国籍のお母さんが来てくれているが，やっぱり学校や学習についていけないようだ。授業に１学年２学年遅れている状態で，どこかさみしそうだったり，地域としても，歓迎しているムードにもなかなか感じられないなというふうに思っている。外国籍の子が多い学校というのも，市内でも万別だと思うので，学校によって課題が違うのかとも思う。小学校の先生をしているママ友が，外国籍を持つ子どもが教室に一人いると，どうしても授業の進め方や関わりに難しさを感じると言っている。サポーターさんが付く人と付かない人がいるということだ。

朴副委員長　私もそのサポートにあたったことがあり，当時は 30 回だったが，それより回数が増えたようだ。定かではないが，50 回以上か。それでも全然足りないと思う。サポート期間が終わったらもう誰もサポートしてくれる人がいない状態になる。

齋藤委員　そういう話も聞いたので，環境の整備も不十分なところがあるのかなと思う。社会教育にありつくまでにたどり着かないというか，学校教育すらもちょっとままならないとか。

あと先日茨城で，女性の社会活躍のリーダーをつくるというイベントに行ってきたときに，来日時に高校生の年齢に到達している外国籍の子どもは，義務教育を受けられないと聞いた。サポートが受けられず，苦しんでいるお子さんが全国にいらっしゃるということだ。仙台でどんなふうになっているのかわからないが，日本で言う中学生の年齢に１日でも被ればいろいろサポートしてもらえるけれど，１日でもずれるとできないという話を聞くと，「子ども」と括ってしまうと難しい部分があるのではないかと思う。どこに焦点を当てるかというのは，ポイントになってくるのかなと思っている。

松本委員長　中学生を含めたとしても，厳密に区切るのが難しい問題があるかもしれないが，一旦共通見解として，年齢の幅を小学生から中学生というふうにして進めた方がよいかもしれない。未就学児となると親の居場所という側面が強くなるという話もあったので，まずは小中学生ということで。そうすると，子ども主体という話で進むことになるが，この「子どもを主体とした社会教育のあり方について―学ぶ喜びと居場所のために―」というテーマそのものについては，決定ということでよろしいか。

各委員　了承。

松本委員長　協議の視点の案についてはいかがか。

泉山委員　先ほど，言葉についてはこの後また検討しながら，ということだったが，外国にルーツを持つ子どもということ自体は問題ないと思うものの，文科省の資料だったか，海外経験の長い日本人の子どもというのも取り上げられていた。ルーツというよりも，日本の社会になじめていないという意味合いで捉えた方が広く議論できそうだと思うが，いかがか。この前教育実習を訪問した際に，イタリアに長く行っていて，バカンスの期間だけ日本の学校で日本語を勉強している子どもがいるという話を聞いたことを思い出し，提案してみた。

朴副委員長　ある支援団体では，以前は「外国人」と言っていたが，帰国子女もいろいろ課題があるということで，「外国にルーツを持つ」という言い方になった。

泉山委員　その場合のルーツといったときに，文化的背景のようなものも含めて捉えているということか。

朴副委員長　そこまでの深い疑問はなかったが，帰国子女も増えているので，支援の対象にしましょうということでルーツという言い方に。確かに，「ルーツ」という表現が適切かどうかは検討の余地があるかもしれない。

松本委員長　表現がなかなか難しいところなので，外国にルーツを持つ子どもと言うときに，海外経験の長い子ども，いわゆる帰国子女も含めるというふうに，私たちで定義をすればよいのではないか。

泉山委員　またうまい表現が見つかればそのときに。

朴副委員長　長く住んで日本国籍になっても，本来のルーツは中国で，その子どもは日本語も喋るが日本の教育システムがわからないという例がある。外国がルーツということについては，国籍を変えたとしてもそういうことがあるので，幅広くいろいろ踏み込まないといけないかなと思う。

松本委員長　外国にルーツを持つ子どもを狭く捉えず，少し広めに捉えた方がよさそうだというご意見。

「外国にルーツを持つ子どもの社会教育のあり方」というのは，もう対象がはっきりしているので考えやすいかと思うが，「地域における子どもの居場所」というのは，ちょっと漠然としているので，あとは部会の方で揉んでいただく必要があるかなと思う。

高橋委員　小学生と中学生を対象にしていただけるということだが，「地域における」というのは，学校外という括りの子どもの居場所ということか。休日とか放課後とか部活外とか，本当に街の中といったところなのだろうか。

松本委員長　そうなると思う。

中山委員　私の地元の出雲だと，外国にルーツを持つとなったときに大体イメージがつくが，仙台に関して，校区によって特徴があるとか産業構造的にこの地域はこうとか，皆さんのイメージがあれば教えてほしい。あとは事務局の方にも，海外にルーツのある小中学校の事例のようなものがあればお聞かせいただきたい。

朴副委員長　仙台では，東北大学に留学する方々とそのお子さんというイメージが強かったが，今はどちらかというと国際結婚と，仙台に残って子育てしている元留学生の子どもが多い。地域，エリアでいうと東北大学の寮がある三条町，国見小学校。国見小学校のところは外国人の子どもがいるイメージが相当強いかなと思う。今は国見小学校だけではなく八木山小学校等，点在していて，増えているのは確かだ。仙台市の中心より少し離れたところに点在している感じもする。

高橋委員　私も最初は東北大の留学生の方というイメージが強かったが，どこの学校でも就労で来ている外国人の方のお子さんがいる。東宮城野小学校のような単学級の小さい学校でも，モンゴルから来た兄弟がいて，もう英語も通じない，漢字も通用しないということで，教育委員会から通訳をしてくれる先生に来てもらったこともある。いろんな国の方が就労に来て，県営なり市営なり安い住宅にお住まいになって，子どもを近くの学校に入れるというのが増えている気がする。

朴副委員長　就労で来ている外国人は低収入層が多く，市営住宅にそれなりにいる。中国が一番多いが，モンゴルとベトナム，ネパール等。以前より広がった感じで，アジア系が多い。

齋藤委員　市のホームページにも外国人の住民数が出ていて，子どもとは限らないがやはり１位は中国人と出ている。次に韓国，ベトナムも出ているのでほとんどアジア系だと思うが，エリアが結構点在している。私が見ているの

は鶴谷小の子で，鶴ケ谷には大きな市営団地があるので，どうしてもそういう子が多いようだ。留学生よりは就労で来ている人が最近多いのかなと思う。料理店を営む方たちのお子さんや，東京エレクトロンみたいな大企業が近くにあると，海外赴任ということで日本に来ている人のお子さんも多い。明泉幼稚園もかなり外国籍のお子さんたちがいる。

中山委員　あちこちに点在しているということだが，そうすると子どもがぽつんとなっているのかなというところも見る必要があるかもしれない。あとは一家族あると同じような家族がどんどん増えていき，集団全体として困るということがある。知っている出雲の事例だと，ブラジルからなのでポルトガル語なのだが，小さな町内を形成するような，リトルブラジルのようになっているところがある。楽しくやっているのかもしれないが。そういうところは仙台にはあるのだろうか。

内藤委員　いろんなところに点在しているというのはそのとおりだと思うが，多くの外国人の方が国ごとにコミュニティをつくり，偏って住んでいるような地域が沢山あるのだと思う。今すぐ出てくるところだと，太白区の向山だったり，青葉区の山手町近辺だったり，そういうコミュニティで同じ国の人たちが住みやすい状況になっている。コミュニティが今どういうところにできているのかわかる資料があれば，市に出してもらって，共通認識が持てればよいと思う。その中で，子どもを持つ方がどれくらいいるのかというのは私も把握していないが，そういうコミュニティで外国籍の子どもも増えていくのだろうなと思う。

朴副委員長　チャイナタウン的なコミュニティのイメージがあるかもしれないが，仙台には「タウン」というようなものはまだないのではないか。ママ友で繋がっているような小さなところ，卸町や大和町辺りの子育てママを通すと，中国の方の話はいくつか出てくるが。仙台市全体の話だとすると，教育委員会から日本語支援で派遣される留学生とか社会人等，支援に携わる人に関するデータがわかれば議論しやすいかなと思う。どの小学校に派遣されているかといったデータはあるのではないか。

中山委員　そういうエリアであったり，ぽつんといる子たちがもともとの仙台とか日本の文化，社会教育になじむというか，そういうのもよいだろうし，もしかしたら独自の，言語に由来するような地域の何かをつくっていて，そこで壁をつくるのではなく一緒に楽しくやりましょうよということがあるのであれば大歓迎だと思うが，どんなふうにやられているのか。そもそもやられていないかもしれない。

安藤委員　外国人の子ども・サポートの会というのが市内にあるのだなと思って見ていた。前期もどこに調査に行くかピックアップしたが，テーマに選んだものの，仙台市内限定の調査で，はたして進むのかなという心配がある。

他の自治体で，先進的なところでこういうことがあるというような場所の選択肢があればよいが，やっていないところで何をどう調査するのかということになったら，煮詰まってしまうかもしれない。

朴副委員長　そういったところで仙台観光国際協会がある。以前は仙台国際交流協会があったが，観光部門と合併した。10～15年前に，宮城県の国際交流協会と仙台国際交流協会，それから外国人の子どもを支援しているいくつかの団体とコラボして，ガイダンス会を毎年開催していた。それに関する教育委員会と仙台観光国際協会のデータが使えるかもしれない。

松本委員長　前提として「外国にルーツを持つ子どもの社会教育のあり方」という部会そのものはこれで進めてよろしいか。仙台市における外国人の現状ということでお話しいただいたが，おそらく他の自治体に比べると留学生関係が多いものの，労働者のご家族や子どもも多く，どこかに集中しているわけではなくて市内に点在しているということ。国籍はアジア圏が多いが，その中でも多様性があること。外国の方が集中しているようなコミュニティもあるかもしれないが，そもそもコミュニティをどう捉えるかという話でもあり，どういう調査になるのかという話にもつながってくるかと思う。実際に支援をされている団体や機関，仙台観光国際協会もあるので，調査対象としては問題ないかと思う。

あとは一つ目の「地域における子どもの居場所」も視点としてはよろしいか。

各委員　了承。

（２）協議テーマの視点について

資料３に基づき，協議テーマの視点における現状や課題等について２組に分かれてグループワーク式の意見交換を行い，それぞれの内容を発表した。

〔Ａグループ発表内容：１．地域における子どもの居場所〕

若生委員　Ａグループでは居場所に関して，学びについてなのか遊びについてなのかというところが一番悩んだ。社会教育として考えたときにどちらが重要なのかということで，遊びながら学ぶ楽しさや行きやすさ等，どういう地域で，どういう単位でやるのかというところについて調べないといけないのではないか。部活動とか文化活動とかそういうものについては居場所を支える「人」も必要だし，「場所」も必要だという話になった。

社会教育として考えたときに，これは学習支援を考えるのか，不登校対応を考えるのかそれとも福祉的な対応を考えるのかというところについても，どうなんだろうというところで，答えがまだはっきり見えていない。

あとは，誰が実施する社会教育としての居場所なのか，居場所を支える子ども食堂とか，社会教育施設の配置密度，科学館とかそういったところに興味を持った子どもたちが子どもたちだけで行って学ぶことができるのか，そこに大人も参加するべきなのかということ等を，皆で「？」をつ

けながら考えているうちに時間が来たという感じ。

〔Ｂグループ発表内容：１．地域における子どもの居場所〕

中山委員　同年代の友達や遊ぶ友達がいないとか，そもそも繋がりがないのではないかという意見があった。また，共働き家庭や両親が長時間不在であるといった家庭の環境・背景がある場合，そういう子たちが行けるような活動場所がないかもしれないという意見，遊ぶ場所ができたとしても，学校等であれは駄目これも駄目という制限があると，子どもたちの自主性が育まれにくいのではないかという意見もあった。

親世代としては，習い事に行ってもらえるとその間は安心できるし，そこが子どもたちの居場所になっているかもしれない。私はスポ少をイメージしていて，楽しく活動しているところもあれば，参加者が少なくて困っているところもあるかもしれない。それから，習い事等も含め，そういった場所でスタッフはどんな支援をしているのだろうかということや，「喜び」がキーワードとして挙がっていたと思うが，参加している子どもたちが喜びや達成感を感じているのかどうかということも気になる。そしてそれらの活動に対して，行政としてどんな支援が必要か，できているかということ，活動している団体同士がうまく連携しているかなということも気になる。参加するとなると、参加費等の金銭的な負担も家庭では気になると思う。

不登校と書いてあるところについて，学校に行けない子にとっては放課後とか土日だけではなく，平日の日中にも居場所がないのではないかというところも気になった。

〔Ａグループ発表内容：２．外国にルーツを持つ子どもの社会教育のあり方〕

泉山委員　先ほどもいろんな国から仙台に集まっているという話があったので，いろんな言語に対応しなければいけないという意見が多かった。その対応をどうするか。場合によっては，対応できる人がいないのではないか。そのある意味延長線上に，子どもの方は日本語に馴染んでいても，大人がそうではないというようなこともあるかと思うので，今回子どもがテーマだがそういう人たちも場合によっては対応が必要で，家庭内の多言語状況への支援というのにも繋がるかなという意見が出た。一方で，日本の文化・社会に馴染んでもらう，あるいはその人たちの母国の文化・社会への理解というようなことも重要ではないかという意見もあった。例えば，こちらとしては当然と思ってやっていることが，外国の人にとっては失礼なことにあたるといったような理解が欠かせない。そういったことを考えたときに，観光国際協会や，外国籍の子どもが多い学校等が実際にどういう取組をしているのかということは一つ手がかりになる。また，これらの活動が目指すものをどう考えるのかということで，日本に定着する人を育てるような意識があるのか，それとも地域に今いる人たちが日本の社会とどう繋がっているのかというところを見るのか。そういうタイムスパン的な話も出た。あと現状を知るということで，今日ちょっと観念的に話をしたとこ

ろだったと思うので，しっかりと裏付けをとっていかなければならないという意見もあった。

〔Ｂグループ発表内容：２．外国にルーツを持つ子どもの社会教育のあり方〕

齋藤委員　Ｂグループの方で全員が出したのが，言葉の壁があって学校の勉強にもなかなかついていけない，不十分である部分が多いのかなというところ。日本人でもそうだが，言葉の壁だけでなく，もしかしたら発達のでこぼこ等，困難を抱えている子たちを取りこぼしている可能性があるのではないか。親の仕事等を理由に仙台にやって来ることが多いと思うが，親も地域との繋がりや支援先との繋がりというものが不十分なのではないかと思っている。どうしても忙しく，自分たちのことでいっぱいいっぱいで子どものケアまではしてあげられないというのも，実際に私の生徒さんは多い。言葉の壁があるということが一つの大きな要因になり，日本人の友人が少なかったり，繋がり自体も希薄化していたりする可能性もある。ただ，子ども同士は案外，国籍とか関係なく繋がり合っている可能性もあるので，そういう事例も知ることができたらよいなと思う。

あとは，Ａグループでも出ていたがまずは現状把握。そもそも市内のどこにそういう子たちが多いのかとか，そういう子たちは今どのように過ごしているかということを把握することが一番大事かなと思った。個々の事例を知ることによって，よい例が導き出せると，もしかしたら，ゆくゆくは外国にルーツのある子どもたちでも，仙台に来てよかったと思えるような居場所をつくるための要素を抽出することができるかもしれない。

外国人の親御さんからは，母国のことを知らずに育ってしまう我が子に対する懸念も聞かれる。自分たちは日本を選んで来ているのだけれども，子どもは日本しか知らないとなると，母国のことを伝える機会がなかなかないということで悩む親御さんも何人か知っている。意識的に，夏休みに１カ月帰国等されてはいるものの，経済状況にもかなり左右されるところもあるのかなと思う。

永住ではなく，一時的に仕事で滞在している場合，帰国後の不安もよく聞かれる。日本の教育のレベルと自国のそれがかなり違っていて，日本に合わせていると帰った時に，どうしたらよいかわからないと相談されることもあった。

松本委員長　大変充実したご意見をいただいたが，各グループのお話を伺っていると，「子どもを主体とした」というテーマは難しいのではないかと感じた。子どもを主体とするより，「子どもを対象とする」という方が現実に合っているのではないか。

中山委員　子どもを取り巻くという感じか。

松本委員長　そうした方がよいと思う。「子どもを主体とする」にこだわると，大事なところが見えなくなってしまう感じもするので，そのあたりは改めてご

提案したい。また，親の問題，家庭の問題について触れたグループもあったかと思うので，そういう意味で少し広めに考えてもよいのかと思う。そこはまた次回検討したい。

調査部会については，「地域における子どもの居場所」と「外国にルーツを持つ子どもの社会教育のあり方」という二つに分けることに同意いただいたので，後日ご意見を伺って調整したい。

他にご意見等なければ，本日の議事は以上となる。

4　その他

委員長より，今後の進め方について説明があった。

事務局より，議事録（案）確認の際のペーパーレス化について提案し，会議より了承を得た。

5　閉会

「仙台市社会教育委員の会議実施要領」第４条及び第５条に基づき会議録を作成し，同要領第６条に基づき委員長及び会議録署名人が署名する。

令和 6 年 9 月 27 日

委　員　長（署名欄）　すぎま　大

署名委員（署名欄）　泉山　靖人